

◆都市部小河川における護岸状況と鳥類相との関係◆

千葉大学園芸学部部緑地環境学科
再生生態学研究室 4年 浅利悠介
博士研究員 相澤章仁



① はじめに

現代の都市部の多くの河川はコンクリートの三面張りとなっています。これにより多くの生き物たちを失ったことが問題となったため、近年では河川の緑化が広まりつつあります。そこで私たちは、都市部の小河川を対象に鳥類調査を行い、護岸の工法や土地利用と鳥類相との関係を調べます。

② 対象地

私たちが対象としたのは、千葉県松戸市内を流れる4つの河川（富士川・国分川・坂川・新坂川）です。この中から、周辺の土地利用と護岸の状態を考慮して600mの調査区間を12か所設けました（図1）。周辺の土地利用と護岸状態の区分は次頁の表1に示します。

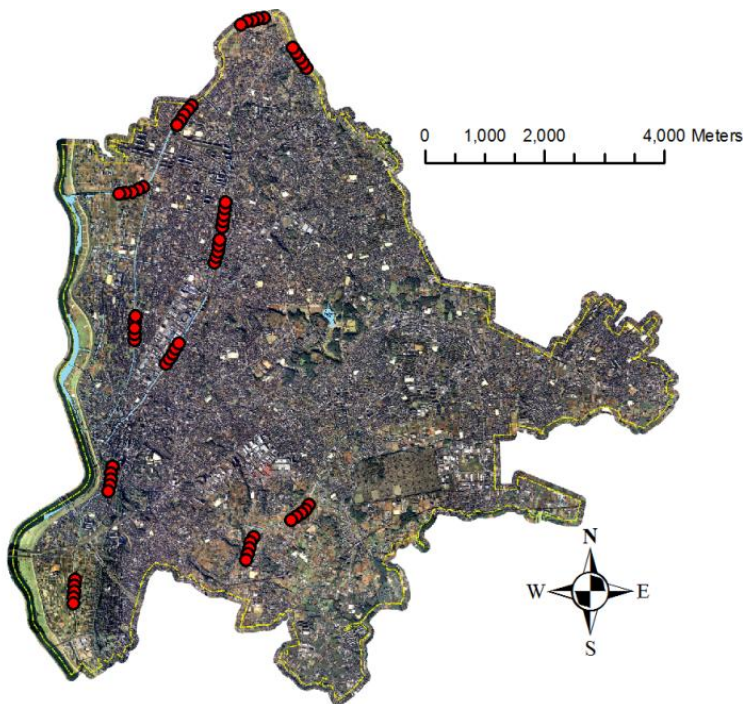


図1
松戸市の航空写真と配置された調査地点
赤い円は調査地点を表し、5つの調査地点のまとまりが調査区間となる。

表1 周辺の土地利用と護岸状態の区分

護岸 周辺土地利用	コンクリート 三面張り型	中間型 (一部緑化)	緑化型
都市型			
農地型			

③ 調査方法

設定した12か所の調査区間の中に、100m間隔で5つの地点をとり、各地点で5分間ずつのポイントセンサスを行います。時間帯は日の出から4時間以内、範囲は半径30m以内とし、範囲内にとまった個体と泳いでいた個体の種類と個体数を記録します。また、記録する際には出現した場所も併せて記録し、利用していた場所が河川の水面か、護岸か外側なのかを分かるようにします。



調査は2012年10月より既に始めており、2013年の繁殖期まで調査を続け、その後データ解析を行っていきます。

④ 期待される成果

サギ類やカモ類、カワセミなどのいわゆる水鳥は、比較的小さなスケールの土地の変化にも敏感であり、都市の中であっても緑化されている水域が存在すればその多様性は上がると予想されます。本研究を通じてどのような土地利用の場所でどのような工法を行うことが鳥類の種多様性を向上させることができるのかを明らかにすることにより、今後の河川緑化に指針を示すことができると考えられます。

